かくれんぼ

かくれんぼ

早川博喜

早川博喜
はやかわ ひろよし

大正8年甲府市に生まれる。
第一東京市立中学校（現東京都立九段高等学校）から東京高等工芸学校（現千葉大学工学部）卒業。
新京第二中学校教諭、甲府市社会教育課長、甲府市職員研修所長等を経て、現在甲府市立図書館長。
山梨県公共図書館協会副会長
関東地区公共図書館協議会幹事
甲府ユネスコ協会理事
山梨県読売ブック・クラブ顧問
現住所　甲府市東光寺町１９５３番地
（ＴＥＬ．３５～３２６８）

かくれんぼ
昭和四十四年三月五日　印刷
昭和四十四年三月十日　発行
定価　四五〇円
著者　早川博喜
発行者　弓田博
発行所　共栄図書株式会社
東京都千代田区神田神保町一の五九
（電話　二九一～七七七七）
印刷所　協同印刷社

序

早川さんは私にとつて未知の人ですが、私と中学の同級生で今も交遊のある露木寛君を介してこの書の校正刷を拝見、思ひつくままを記すことにしました。

露木君からの便りの中に、早川さんについて「本人は、御覧下さる文にも出ているように誠に真面目すぎる程の人物です」とありますが、私はこの書を全部読んで露木君の云ふところを、全くその通り、とうなづきました。

早川さんは、正常人である、と感じられます。文学に限らず、凡そ芸術にかかはる人間には、ときあつて他人の目に異常とうつることがあるものです。デエモンにつき上げられて他の一切を顧みることなく、ただ一途に制作の迷路に沒入するとき、彼はしばしばこのやうな貌（かたち）を示すでありませう。

とは云へ、かういふ貌になるといふことがそのまま優れた作品を生むことにつながるとは申せません。それはしばしば空廻りに終ります。デエモンの助力を、多く有効に生かし得るのは天才

と称ばれる人でなければなりません。

私は早川さんに親近感を覚えます。理由は簡単です。私自身もまた、早川さんと同様、天才ふうなところが無いと自覚するからです。

「かくれんぼ」「冬の日」「六月の夜」「承徳」「途上の人」「床屋」など、この書の始めの方にある短篇、あるひは小品は、まとまつてゐると思ひます。瀧井、井伏、網野、上林、安岡諸氏の作品に対する感想は穏当だと思ひます。その他の随想も読み易いと思ひました。そして結局、早川さんの文章は、行書ふう、あるときは草書ふうである、と感じました。

行書には行書の、草書には草書の面白味があるのですから、それはそれでいいのですが、ときどき流す感じの所が目につきました。これを避ければ、もっと良い行書、草書になるでせう。

早川さんは、「これまでのこと」の中で瀧井孝作氏の文章の一節を引いてゐます。

――（略）腰据ゑて、粘つて粘つてジリジリと書く、又、辛抱して堪える、遅筆の仕事の方法を覚えこみました。ものごとをハツキリと見定めて、底の方までとほつた言葉で、一行一行充実した文章、これは速筆では駄目で、（下略）――

瀧井氏のこの仕事ぶりは、七十代半ばに至つても衰へず、この正月の『新潮』誌上に、百余枚の力作佳篇「俳句仲間」となつて現はれました。敬服に堪えません。と同時に、瀧井氏が、文学

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

者仲間にとつて最も怖い存在の一人であることを今更のやうに心に銘じました。

早川さんは、この瀧井氏から文章上の注意を受け、「急に身体が深い淵の中にでも沈んでゆくような気がした」と記してゐます。私には早川さんのその時の気持が判るのです。実は私も、瀧井氏からは、ときどき叱られるのです。

ですが、私は、今度こそと思つて書いてゐます。書くのを止めません。早川さんも多分同様のお考へだらうと思ひます。お互ひ天才でない者にとつては、努力の一途しかないのです。「誰が云つたのか忘れましたが「天才とは努力なり」といふ言葉もあつたやうです。この一巻を里程標として、さらに精進されんことを祈り上げます。

昭和四十四年三月上浣

尾崎一雄

目次

かくれんぼ……一
冬の日……八
六月の夜……一六
承徳……二五
途上の人……四二
床屋……五〇
網野菊氏の人と作品……五八
「さくらの花」の著者……六〇
網野菊著「さくらの花」……六四
深沢七郎著「笛吹川」……六六
〈定本〉八木重吉詩集……七一

安岡章太郎著「舌出し天使」……七八
安岡章太郎著「花祭」……八三
井伏鱒二氏の作品……八五
上林暁著「春の坂」……九〇
榛葉英治著「赤い雪」……九七
相撲二題……一〇四
ファンの心理……一〇八
私の人生の一冊の本……一一三
人生について……一一五
山口さん……一二〇
一葉の碑……一二五
夏の海辺……一三一
成ちやん……一三六
子猫……一四六

自転車……一五四
五月来ぬ……一五九
一つの暦……一六六
秋の日……一七八
活動写真……一八五
これまでのこと……一九一
あとがき……二一七

かくれんぼ

僕と敏子さんとは叔母と甥の仲である。だが僕の母は継母（けいぼ）で、敏子さんはその母の幾人ものきょうだいの一番仕舞だから、年も僕とは三つしか違わない。だから僕は子供の頃から敏子さんを叔母さん扱いなどしたことはなく、いつもそのまま「としこさん」と呼んでいた。

僕の実母は僕が三つ時分に死んだのだが、その俤はなに一つ残っていない。いまの母がきたのも同様でそれらしい憶えはまるでないのだが、ただそのきたばかりの新しい母に、恐らくは初めておぶさったことの記憶だけは、なぜかいまも妙にはっきりと残っている。

――母はその頃の人がした鬢を平たく脹らました束髪に結っていたが、その襟元からは濃い白粉の匂いがこぼれていた。母は背中の僕に絶えず笑いかけたが、笑うと綺麗な歯並が細かく光って、それがへんに賑やかに見えた。若い母は時に小走りに駆ける真似などして、僕の体を大きくゆすりながら、「ヒロちゃん、母ちゃんよ、ホラ、母ちゃんよ」とそり身になって、弾んだ声で背中の僕に呼びかけた。そんな母の艶やかな感じから、幼い僕にもなにか急に自分にない、別のもの

がきたという気がした。その母が別の人という気もしたし、母の背中におぶさっている自分が急に別のものになったような気もした。そしてそれが、子供心にも嬉しかったり、いくらか不安のようでもあった。……こんな幼時の記憶が、このことだけは郷里の街の情景さえはっきりと映って、妙に眼に見えるように浮かぶのである。

母の里はこの郷里の市から三里ばかり離れたN村という土地である。東南には連山の背に突出た富士を、北には平坦な田野の彼方に八ケ岳が眺められ、西はその田野を限って程なく山地にかかり、南アルプスの前山が、ずっしりとした量感をもって迫っていた。

僕は小学校の二年からは父母と東京に住むようになったが、毎年夏休になると、郷里の市の父方の親戚へ行くと同時に、このN村の母の実家にもよく行ったものだった。N村には敏子さんがいるので、二人で遊ぶのが愉しみだった。敏子さんは本好きで、お倉にいってはよく飽きもせず雑誌などに読みふけっていた。僕も子供のわりには小説などを読み散らしていて、小説家や挿絵画家の名前などは敏子さんに負けず知っていた。それに僕はそうした挿絵を真似して描くのがうまかった。そこで華宵なんかの描く美少女や前髪立の美少年なんかをその通りに描くと、敏子さんは喜んでそれを欲しがった。「ヒロちゃんは大きくなったら、いまに小説家か絵描きになりなさいね。ヒロちゃんならきっとなれるわよ」と、敏子さんはそんな風にして、自分の夢を僕に託

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

していた。その夢はまたどこか僕に対する愛のかたちをも帯びていた。僕はともすれば他人の愛におもねるような孤独な境遇にあるだけに、そうした敏子さんの気持をも敏感に読み取り、いまにそういう人間になって敏子さんを喜ばせてやろうとする想いが、瞬時自分のうちにきらめいたりするのだった。

またこの頃は、この家の祖父や祖母に連れられて、西の山の裏手にあるNという山の湯に、二年程続けて行ったことがある。無論敏子さんも一緒だし、ここの家督を継いでいる叔父のすぐ下の弟で東京の大学の助手をしている叔父なども、夏休で帰省していて一緒に行った。この山の湯へ行くには、祖父や祖母はトロッコの通っている道順を選んだが、僕達はまだ夜の明けきらぬうちからここを立って、やがて山路にかかると強力（ごうりき）を雇って、荷物はその背に任せて一日がかりで山路を越して行くのだった。湯の宿は渓流の縁に臨んで山の急傾斜に建った高い木造のつくりで窓を払えば眼下に渦巻く急流の水吹（しぶ）きを渡って、冷やかな山の香がいちどに流れ込んできた。

敏子さんはもうこの頃は女学校に上っていた。僕達と一緒に湯に入るときは、手拭を首から膝の辺まで垂らして、それで全身を覆いながらはいってきた。そうした少女の含羞が子供の僕にはまだ意識の閾（しきい）の埒外（らちがい）にあって、自分はいち早く湯船から体を抜きあげながら、そんな窮屈げなようすで湯にはいるのを、僕はへんにもどかしいような気持で眺めたりした。

この湯の奥には、宿のある側の山腹を伝わって渓流を上ってゆくと飛瀑がある。僕は敏子さんや叔父達が他の浴客に混ってさかんにピンポンに興じているので、自分だけ除者(のけもの)になったような気持で、それに対する反撥から一人でそこへ行ってみた。その滝のあるあたりは森閑として、ただ山中の高い断崖からすさまじい音をたてて落ちる水の音を聞いていると、僕はまるでその音に打擲(ちょうちゃく)されるような気がし、なにかいいようのない恐怖心が自分のうちにひろがるのを感じた。

――するとその時、「ひろちゃん、――」と呼ぶ声がし、見れば敏子さんが急いでこっちにやってくる姿が、一すじの光のようにひらめいた。「ひろちゃん、どこへ行ったかと思って、心配するじゃないの」と敏子さんがまだ胸に波をうたせて言うのを聞くと、僕はさすがに一種の呵責(かしゃく)を感じて、つい眼を伏せた。しかし内心ではその敏子さんの胸の中にいきなり飛びついていきたいような想いが、しきりと込み上げるのを感じていた……。

僕もやがて中学に入った。その二年の時の事である。僕は東京にきている父方の従兄から或る時意外な話を聞かされた。それは、母が父のところへくる前にT村というN村よりもっと山際の部落に嫁いで、そこで男の子をもうけたというのである。母は婚家の人達と折合が悪く、その子を残したままその家を出たのである。僕はたとえ生(な)さぬ仲でも母には子供といえば自分一人しかないものと思っていたのに、その母が自分のものではなく、実はもっと血肉を分けた本当の子の

母であったのかと思うと、矢庭によこしまな嫉妬をいだき、その母の姿がいまは僕のもとから一散に遠のいていってしまうような気がした。――僕はそれでもこの中学の時分にもやはりN村へ行った。そして行くたび敏子さんが美しくなっているのを感じた。しかも容姿が多分に母に似通っていた。僕はそうした敏子さんの前では、いくら心に思ってみても、母の実子のことはとても聞く気にはなれなかった。

もう中学も五年の夏休だった。僕は高等学校の試験を控えながらもやはりこの年も四五日N村へ行った。ちょうど村は祭の日を挟んでいて、その晩僕は敏子さんとその祭を見に出掛けた。村の東にひときわ高く築かれた堤防を越えると、その下に鎮守の森があり、そのあたりは高く輪になって電燈が点り、多くの村人達で賑わっていた。二人で両側に屋台などの並んだ中を引返すとこの時不意に酒に酔った若者が三人ばかり寄ってきたと思うと、僕の胸元にドシンとばかり突き当った。「この野郎、若造のくせに、馬鹿にイチャイチャこきやがって」と罵声を浴びせるそばから、いきなり平手が僕の頬に飛んだ。「何をするんだ」僕もすぐさま相手を突除けた。「こん畜生、ふざけやがって」。「ひろちゃん、およしなさい」敏子さんの甲走った声が耳を掠めた途端、「くそ、いい気になりやがって」と、相手の一人が突然横合から下駄履きのまま脇腹を蹴った。その拍子に僕は脆くも前のめりになって膝をつき、その場にかがみ込んだ。「ざまあみろ」。

「へ、いい気味だ」とまだ悪態を吐きながらも、根は案外小心らしく、連中は早々に立去っていった。いつか周りには人だかりがしていた。敏子さんはその中で膝を落して、僕のズボンの土などを払ってくれた。「ね、歩ける?」僕が頷くと、敏子さんは人目をこばんで急いで僕の手を引いていった。堤を越えると、その高さに仕切られて、こちら側の田圃道はまるで夜が濡れたように暗かった。「ほんとに大丈夫?」。「うん、もう平気だよ」事実僕はもう痛みも何もほぐれていた。そしてふと気付くと、敏子さんはまだ僕の手を固く握りながら歩いていた。「ね、少し休まない。私、息がきれたわ」敏子さんは途端に肩息しながら言った。「ご免ね、心配かけて」。「ばかね、そんなこというと、私泣くわよ」言ううちに、敏子さんの瞳には早くも涙がキラキラ光っていた。「ひろちゃん、可哀想だったわ、あんなひどい目にあって」言うなり敏子さんは両手で僕の顔を挾んだ。僕は胸が動悸して、思わず膝頭が慄えた。「ひろちゃん、……」敏子さんは涙の眼を閉じると、その手を僕のうしろに廻し、柔らかく張った胸ごとひしと体を押しあてて唇を交わした。僕は身内を貫く甘い、哀しいような陶酔感から、自分もそのまま濡れた夜色の底に墜ちていくような気がした……。

翌日僕は東京に帰った。敏子さんは送りに出ながら道の途中で手紙を手渡し、ここで別れるからと言った。その敏子さんの顔は如何にも寂しげだった。

ひろちゃん、堪忍して。手紙を書きながらも涙が出て仕方がありません。いくら義理の仲といっても私とあなたはただの他人とばかりはいえない筈です。それを思うと身がさいなまれてなりません。

私とあなたは三つ違いで、私はいつもそのことを思っていました。私とすればこのことが、あなたに対する感情のせめてもの言訳になるような気がしていたのです。——と、そうした事が書かれていた。そしてその末に、この秋には東京の沼袋の商家に嫁ぐことになっているという事が告げられていた。

敏子さんはその通りその年の秋に東京に嫁いだ。しかし直ぐと体を害し、清瀬の療養所にはいったが、僕が高校二年の時そのままそこで他界した。母が行くたび僕に会うのをこばむ風なので、僕もついぞ敏子さんを見舞う事もしなかったが、考えれば敏子さんでも母でも僕とはなにか互いにかくれんぼでもするみたいな、そういう運命の許にあるような気がした。時代は日増に戦時色に覆われた。僕はもう学校もやめて、なぜか念頭を離れない母の実子の幻影を絶つためにも、いっそ自ら戦地に赴いて、全てをまた放擲したいような想いをいだくようになった。

（昭和四十年三月　小説新潮）

冬の日

日曜日の朝、食事をすませたあと炬燵にもぐり込みながら、僕は妻にシラガを取ってもらうことを提案した。妻は案の定これをイヤがった。そこで暫く押問答を重ねる具合になった。結果はことシラガともなれば、僕の我執が妻を制した。妻は憤懣の情を口角に浮かべながら、あたかも猫の首根っ子でもつかまえるみたいに、僕を炬燵から陽の当る縁側に引出した。

縁側に出ると、僕は身体をちぢかめて、妻の膝枕で取ってもらうことにした。僕もつい理不尽を並べたので、内心多少はヤマシい気持もなくはない。——だが、一体シラガを取るというのは自然の摂理に反する、それほどウシロメタい行為だろうか。シラガなんか出たら出たままにしておけばいいじゃあないの、というのが妻の持論だが、人間にはそれぞれ性向があり、趣味嗜好もことなるからそこがまた厄介なのだ。

妻は僕がシラガを取りたがると、シラガを取って、年甲斐もなく若く見せようとしているぐらいにしか受取らないのである。遺憾ながらそれも事実といえば事実だが、但し、それがために一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.